

## What is 薩英戦争

1863年7月2日・・・薩摩、現在の鹿児島県。この日の未明に薩摩藩が保持していた汽船3隻を拿捕したイギリスの艦隊に対して、その日の正午に薩摩藩の砲台が猛然と砲撃を加え、とても激しい台風の中で薩英戦争が始まった。

### 「生麦事件」

1862年9月14日生麦事件が発生してしまった横浜郊外の生麦市で薩摩藩の行列を乱したとされるイギリス人4名のうち3名を薩摩藩士榑原左座衛門。梅江田信義らが殺傷。

1863年5月、イギリス行使代理のジョンニールは、生麦事件での賠償金100000ポンドを受け取った。なお、この賠償金は薩摩ではなく幕府が払った。

6月22日に彼は薩摩藩との直接的な交渉を行うため7隻の艦隊を出航させる。

6月27日、イギリス艦隊は鹿児島湾に到着し、鹿児島城下南約7キロメートルの谷山郷沖に投錨した。薩摩藩は総動員体制をとり、寺田屋事件関係者の謹慎も解かれた。

イギリス艦隊はさらに前進し、鹿児島城下前の浜約1キロメートルに投錨。艦隊を訪れた薩摩藩の使者に対してイギリス側は国書を提出し生麦事件の犯人の逮捕と処罰、および遺族への賠償金2万5000ポンド要求した。薩摩藩側は回答を留保、翌日に鹿児島城内で会談を行うことを提案している。

6月29日、イギリス側は城内での会談を拒否。そして早急な回答を求める。

薩摩藩は「生麦事件に関して責任はない」とする返答書をイギリス艦隊に提出し、イギリス側の要求を拒否。イギリス艦隊は桜島の横山村小池村沖に移動した。なお薩摩藩は処罰の対象を犯人ではなく、藩主だと勘違いしたため拒否したという説もある（要求文翻訳を担当した福沢諭吉が急いでいたために原文を直訳してしまい事件の責任者と藩主の区別があいまいになったため）。

一方、奈良原喜左衛門らは、イギリス艦への奇襲を計画した。梅江田信義、黒田清隆、大山巖らが、国書に対する答使とスイカ売りに変装して艦隊に接近。使者を装った一部は乗艦に成功したがイギリス艦隊側に警戒され、殆んどの者が乗艦を拒まれたため作戦は中止され、奈良原は退去した。

7月1日、ニール代理行使は薩摩藩の使者に対して、要求が受け入れられない場合は武力行使に出ることを通告した。薩摩藩は開戦を覚悟し、藩主・島津茂久と後見役の島津久光は、鹿児島城が艦砲の射程内と判断されていたため、新たに本営とされた千眼寺に移った。

## 「戦闘」

イギリス艦隊は蒸気船を失った薩摩藩が戦意喪失すると油断していたため応戦が遅れたが、7月2日14時、100の砲（そのうちの21門が最新式のアームストロング砲）を使用して陸上砲台（沿岸防備隊・台場）に対し艦砲射撃で反撃した。

キューバー中將は拿捕した白鳳丸、天佑丸、青鷹丸を保持したまま戦うのは不利と判断し、貴重品を持ち出してから、3艦を焼却した。

イギリス艦隊は台場だけではなく、鹿児島城や城下町に対しても、砲台やロケット弾で攻撃を加え、城下で大規模な火災が発生した。陸上砲台や近代工場を備えた藩営集成館も破壊された。

薩摩藩の砲の射程距離は、イギリス艦隊に比べると短く劣っていたが、荒天のため、艦隊の操艦が思うように行かず、砲の標準も定まりにくいイギリス艦隊は予想外の苦戦を強いられていた。また薩摩藩は湾内沖小島付近集成館で製造した水中爆弾3基（地上より遠隔操作）を仕掛けて待ち伏せしたが艦隊は近寄らず、失敗した薩摩藩の陸上砲台によるイギリス艦隊の損害は、大破1隻、中破2隻他、死傷者は63人（旗艦ユーライアスの艦長、副長を含めた死者13人、負傷者50人）に及んだ。

旗艦ユーライアスの被害の中には、薩摩側の攻撃によるものではなくアームストロング砲の爆発事故によるものもあったが、イギリス海軍は薩摩によるものとして、賠償要求に含めている。なお当時の事件を伝える新聞では、負傷者の洋裁が掲載されているが、爆発事故には一

切触れられていない。この爆発事故のほか、不発が多いことが実戦で判明したため、アームストロング砲はイギリス艦隊からすべての注文をキャンセルされ輸出制限もはずされて海外へ輸出されるようになり、これが後に日本にも輸入されるようになった理由の一つとされている。

一方薩摩藩側は、人的損害は非戦闘員と5人から8人、負傷者18人ほどであったが、物的損害（鹿児島場内の櫓、門等損壊、集成館、鋳銭局、民家350余戸、藩土屋敷160余戸屋敷、藩汽船3隻、民間船5隻を焼失）は甚大だった。

午後5時過ぎ艦隊は砲撃を止め桜島横山村、小池村沖に停泊した。

## 「戦闘の結果と勝敗」

実質1日半の戦闘で、イギリス側の被害が大きい理由を挙げると、威圧すれば薩摩藩が屈服するという思惑から戦闘準備が不足していた上、開戦当初より暴風雨で操艦が思うようにならず、艦船からの標準が定まらなかったこと、砲撃頻度が低かったことや薩摩藩側の事前演習の標的の近くに艦船が進入してしまい、（薩摩藩側はイギリス艦隊の来襲を事前に知っており、迎撃のため演習を行っていた）薩摩藩側の砲弾命中率が高かったことも挙げられる。

一方薩摩藩側の物的被害が大きかった理由としては、イギリス側の艦載砲やロケット弾の方が命中率、射程ともに優位だったこと、日本家屋のほとんどが木造建築であり艦砲射撃による火災が暴風の影響で大きく延焼したことなどがある。しかし町人の多くが事前に避難していたため、城下の負傷者は少なかった。朝廷は薩摩藩側の勝利をたたえ褒章を下した。

横浜に帰ったイギリス艦隊内では、戦闘を中止して撤退したことへの不満が募っていた。

本国のイギリス議会や国際世論は戦闘が始まる以前に、イギリス側が幕府から多額の賠償金を得ているのに鹿児島城下の民家への艦砲射撃は必要以上の攻撃として、イギリス海軍キューバー提督を非難している。

なお、この戦闘での勝敗については、「イギリス艦隊勝利説」「薩摩藩勝利説」「双方引き分け説」等、学者、研究者などによって意見が分かれている。